

(13) サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂、感謝のミサ

10月27日(土)、ミサには少し早いけれど前方の席を確保するために1時間前に“栄光の門”を入った。門中央の大理石の支柱に彫られたエッサイの樹、その樹の柱の上に立つサンティアゴの像“ヤコブ”が巡礼者を迎えてくれる。巡礼を終えた者が真っ先にこの柱に右手を置き、頭をつけて到着の挨拶をする。我々もそうしたかったが柱を金属製の柵で囲ってある。何百年もの間に大理石の柱は巡礼者の手形で磨り減ってしまっている、その予防策なのだろうか。



正午12時、“巡礼者のためのミサ”が始まった。荘厳にパイプオルガンが鳴り響き、7人の司祭団が殉教を表す真っ赤な祭服で入堂。そうか、サンティアゴはエルサレムで殉教したのだ。聖歌隊

が歌う入祭の歌が終わると、祭壇の上で大司教が今朝到着したばかりの巡礼者の人数を読み上げる。聞き逃さなかった、「クアトロ ハポネセス デ サリア」＝四人の日本人がサリアから到着した。一瞬に消え去ってしまうこの言葉を4人の仲間とともに聞きたくてやってきた。そこには、脳梗塞や癌を克服し、腎結石や心弁の恐怖、足の痛みに耐えて自信を取り戻した仲間の清々しい顔があった。



聖歌隊が入祭の歌を



大香炉が下される



香が焚かれる



大香炉を振るポタフメイロの儀式



10月27日(土)、この日は全く疲れを忘れていた。何故ならこの日、残り僅か4.4キロしかないモンテ・ド・ゴソの公設アルベルゲのバルでゆっくり朝食をとり、8時半頃に出発してサンティアゴ大聖堂まで朝の散歩程度しか歩いていないし、巡礼達成の証明書を貰って感激していたし(写真右 聖なる門の前で)、大聖堂の12時のミサに与かり「四人の日本人がサリアから到着した」というアナウンスをこの耳で確かに聞いたし、更にとてもラッキーなことに、ミサの終りに大香炉を八人がかりで振る“ボタフメイロ”の儀式を目の当たりにしてこみ上げる感動を味わったし、、と言うのは、必ずしも毎ミサごとに行われるとは限らないのだ、その後、しゃれたパブのレストランで目的達成を祝って、プルポというタコのぶつ切りをオリーブオイルで柔らかくいためた料理をさかんにワインで乾杯などして疲れを全く忘れていた。



そして、この日の午後、サンティアゴ巡礼のルーツを見届けたくて、更に西方へ20キロ、高速路線バスで30分程の、古代ローマが築いた小さな港町パドロン(第一回に記した)へ足をのばした。

(つづく)